

創造・発表

誰でも自分の身体で表現できるダンスワークショップを
大学のゼミとの連携で継続的に展開

「みんなでダンス in Ibaraki プロジェクト」ほか

茨木市市民総合センター（クリエイトセンター）

上田 久美子 公益財団法人茨木市文化振興財団 茨木市市民総合センター 文化事業係

障害の有無やダンス経験の有無に関わらず、誰でも参加できるダンスワークショップを、2020年度より継続的に実施している。事業のキーワードは「芸術（アート）×福祉×教育」で、地域の大学と連携している点に特徴がある。ダンスを楽しむことを目的とした単発のワークショップと、公演を目標にワークショップを重ねる2つの形式があり、参加者は一般公募で集まった小学生～90代の方々と、大学のゼミ生である。公演は鑑賞サポート等をつけたバリアフリー公演として行い、大学生は参加・出演だけでなく、字幕作成やアクセス動画作成から当日の運営まで、施設職員とともに裏方も担っている。

●事業の目的・位置付け

「文化芸術基本法」及び「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」に基づき、障害の有無に関わらず、多様な人々の文化芸術活動を促進することを目標とする。また、茨木市は2024年3月に「茨木市文化振興ビジョン（第2期）」を策定、その理念として「文化芸術とふれる・感じる・つながる『場』づくり」を掲げており、本プロジェクトを行うことで、年齢、障害の有無、経済的な状況などに関わらず、より多くの人に芸術文化にアクセスする機会を開くこと、茨木市市民総合センターが地域の社会包摂の拠点となることを目指している。

当館では本プロジェクトを、障害のある方とない方が共に文化芸術活動を楽しむことで、互いの理解を深め、地域における共生社会の実現を推進していく役割を果たすものと考えている。文化芸術活動を通じて自己表現する場を提供することは、地域における文化の多様性を豊かにする意義もあるといえる。

●事業を始めたきっかけ

2018年、茨木市は「茨木市障害のある人もない人も共に生きるまちづくり条例」を施行、財団にも、文化芸術活動の面から、障害の有無に関わらず、人権や尊厳が守られ、支え合う「共に生きるまち」の実現を推進することが求められることとなった。同年、追手門学院大学 地域創造学部 准教授の草山太郎氏から、ダンサー・俳優として活躍する森田かずよ氏のダンスワークショップの共同実施の打診があり、これを受けて2020年度に、障害の有無を問わず参加可能なダンスワークショップを開催したことが、現在の事業に至るきっかけである。その後も大学との連携をしながら継続して

実施している。

●事業の内容・変遷

2020年度に開催したダンスワークショップは、ダンス創作という共通の目的のもと、連携する大学ゼミ生や、近隣の福祉施設から参加した障害のある方々など、多様な人々が一緒に過ごす場となった。この経験をもとに、以後は、毎年1回の単発ワークショップと、3か月間にわたる13回の練習を経て行う「みんなでつくるダンス公演」を継続的に開催することにした。いずれも講師には森田かずよ氏を迎えている。参加者は公募（障害のある人もない人も、ダンス経験、年齢に関係なくどなたでも）と、追手門学院大学 草山ゼミ生である。公演は鑑賞サポート付きのバリアフリー公演として実施し、草山ゼミ生は視覚障害者向けの鑑賞ガイドを担うなど、公演の裏方としても携わっている。

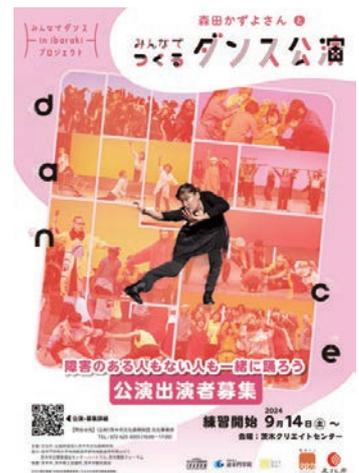
2021年度からは有識者によるトークイベントと講演会も行っている。2023年度はワークショップの映像化を行い、映像上映と活動報告会も行ったほか、ダイジェスト映像も作成。多様な場で事業の様子を見てもらえるようになり、この事業の意義を広めることができた。

2024年度には鑑賞事業としてバリアフリーコンサートも実施。現在も鑑賞型（バリアフリーコンサート）と参加型（ダンスワークショップ）2本柱で取り組んでいる。

2024年度は新たにアウトリーチ活動を実施。音楽や舞台美術（衣装や小物）等の新たな分野にも活動の幅を広げ、「踊る」手段以外にもプロジェクトに関わる人々を増やし、内容の充実を図っている。なお、事業においては視覚障害者向けの鑑賞サポートや点字版資料作成等、アクセシビリティの拡充にも力を入れている。



ダンスワークショップの様子



本プロジェクトの参加者募集チラシ

●事業を行う上での工夫

・当事者やその家族との対話を通じて、参加者のニーズや状態を直接把握するように努めている。また、ワークショップや公演の後には毎回参加者からの感想や意見を収集し、それを次の活動に反映させている。

・当事者、学生、一般の方が誰でも参加でき、特に大学生に関しては出演側だけでなく運営スタッフとしても関わることのできる体制としている。

・事業当日は見守り体制を強化するため、アシスタントの増員、看護師の配置、大学ゼミ生によるサポートも行う。スタッフはワークショップ前に前回のアンケート結果や、当日の参加者の特性等を共有するミーティングを行う。さらに、振り返りのプロセスを充実させることで、常に安全で快適な環境を提供するように努めている。

・事業運営に問題が生じると、担当者皆で話し合い、解決するようにしている。また、自分たちだけで判断がつかないことがあるときなどは、国際障害者交流センター ビッグ・アイをはじめ福祉関係団体等の専門家に相談している。

●研修

障害者、その関係者を主として構成する市民団体が企画する「障害者に係る接遇研修」を、事業担当だけでなく、施設管理係、総務係も含め、職員全員で受講。

●大学との連携

毎年4月、ゼミ生に障害者に関する法律、社会包摂、当該事業の意義などの説明を行い、一定の基礎知識をもってもらうことから始めている。その後、ダンスワークショップに参加してもらい、障害当事者と触れ合い、相互理解を深めている。また、公演への出演のほか、音声ガイドや字幕の作成、当日の運営にも関わってもらった。他にも最寄り駅から会場までの誰もがアクセスしやすい経路案内図や動画を制作するなど、企画も担った。卒業後も公演を観覧するなど、直接福祉などの仕事に就業していなくても、障害のある方に対する意識など将来へつながるものがあると感じている。



学生たちとのミーティング風景

●事業担当者・施設・参加者の変化

【事業担当者・施設】

・このプロジェクトの重要性に気づき、より発展させたいという思いが職員間で強まっている。事業運営にあたっては対応に時間を要する事例も発生し、さまざまな事例に対して迅速かつ適切に対応できるよう、障害の特性や支援方法についてさらに学ぶ必要性を強く感じた。具体的には、専門家による講座や研修に参加するほか、障害のある方やその関係者と普段から接し、日常的な関係性の構築に努めようという意識が高まっている。

【参加者】

・ダンスが生きがいとなり日常生活に笑顔が戻った人や、メンバーと打ち解けることで自分の思いや夢を語れるようになった人もいる。4年連続で参加しているメンバーは、新メンバーに積極的に声をかけたり、振付けの提案を行ったりなど、リーダーシップを発揮するようになった。
・参加者から運営側へと、関わり方を変えて継続的に参加している方もいる。
・学生たちも「ダンスを通じて自己表現の幅が広がり、他者とのコミュニケーション能力が向上した」「異なる背景をもつ人々と関わることで、多様性への理解が深まった」等、多くの変化を感じている。

●事業についての感想・気づき

・障害のある参加者から「ここが居場所」と言われ、とても嬉しく感じた。多様な方々と同じ目的をもって一緒に進んでいくことで、自分自身の成長にもつながっていることを実感する。このプロジェクトを通じて、他者との協力や共生の大切さの一端を理解でき、自分の大きなやりがいとなっている。
・障害のある参加者と一緒に活動する中で、合理的な配慮の必要性を強く感じるが、どのように対応すればよいのか迷うことが多い。声かけやコミュニケーションの方法についても、これで相手に伝わっているのか、意思疎通ができていないのか、確信がもてない場面が多々ある。このプロジェクトを通じて、多様なコミュニケーションの方法や配慮が求められることにも気づいた。考えれば考えるほど、正解はないと感じるようになっていく。

●事業の課題と今後に向けて

①広報活動の強化：より多くの人にプロジェクトを知っていただき、同様の取組を考えている団体とも連携したいが、現在は情報発信が十分でない。SNSの活用のほか、市民団体などと連携した地道な活動や、当事者との直接的なコミュニケーション等を通じて活動の周知を図り、地域社会に本プロジェクトの価値を伝えていく。

②心身の安全性の確保：多様な参加者に、より安全に利用しやすい環境を提供するため、最新の情報を反映した研修を行って職員の育成をさらに進めるほか、ワークショップ後に看護師を交えた振り返りを行い、必要な改善策を講じるなどして環境整備を進めていく。

③継続的な参加の促進：イベントに継続して参加していただける仕組みをつくることが重要。参加者にヒアリングやアンケートを実施し、開催期間や開催時間、場所などについて満足度を確認し、必要に応じて見直しを図っていく。

④鑑賞サポートの見直しと充実：他事例を参考に施設のアクセシビリティ対応を見直し、参加者のニーズに応じたサポートの改善を進める。

●今後の展開

継続参加の方も多いため、居場所として機能するために事業を継続させていきたいが、企画内容や人材の硬直化も懸念される。オンラインプラットフォームの活用やアウトリーチ事業の実施により、より多くの方々に参加の機会を提供するほか、新しい展開として、当財団で行う「手芸部」に衣装係で参加してもらい、楽器作りワークショップを行い音楽で参加してもらい、大学生にももっと運営に関わってもらいなど、出演だけでなく新たな関わり方や展開も進めている。また、他地域の団体やアーティストとのコラボレーションや、他大学との連携も図りながら、多様な視点を取り入れた活動をしていくことで、新たな参加者の獲得や活動の拡大、プログラムの質の向上を図っていきたい。

【「みんなでダンス in Ibaraki プロジェクト」事業データ】

開始：2020年度

補助金等：文化庁 障害者等による文化芸術活動推進事業（2023・2024年度）

実施体制：担当職員は3名。事業当日は職員7名、理事1名に、看護師2名も配置。

外部連携：追手門学院大学 地域創造学部 地域創造学科 草山ゼミ

広報：追手門学院大学 地域創造学部 地域創造学科 草山ゼミ、茨木市立障害福祉センター ハートフル、茨木商工会議所、茨木市観光協会、茨木障害フォーラム、その他の近隣施設・関係部局

バリアフリー対応：補助犬入場可、手話通訳要約筆記手配（事前申込要）、筆談器設置、車椅子での参加可、車椅子のまま観覧できるスペースあり、休憩室利用可、ワークショップや公演中の出入り自由、多目的トイレ各階設置、児童用補助便座設置、オストメイト対応トイレあり、点字プログラム配布、ヒアリンググループあり、開演前鑑賞サポート会実施

【実施者基本情報】

所在地：茨木市市民総合センター

〒567-0888 大阪府茨木市駅前4-6-16 TEL：072-624-1726

設置者：茨木市

開館：1989年10月

管理者：公益財団法人茨木市文化振興財団

規模：センターホール（429席）、多目的ホール（165席）、会議室、生活実習室、工芸創作室 他

施設の特徴：市民が自由に活動できるホールや会議室、ギャラリーを有する複合施設。正面にガラスを多用し採光に配慮した明るいロビーや、中庭などは、市民の憩いの場となっている。

ホームページ：<https://www.ibabun.jp>



写真提供：公益財団法人茨木市文化振興財団